

アールベットと呼ばれる雑誌

大学英語教育学会北海道支部長
河合 靖

2002年6月、JACET北海道支部15周年記念論文集として第1号が刊行され、2005年2月に *Research Bulletin of English Teaching* と誌名が変わって第2号が刊行されました。その後、毎年号を重ねて、今回創刊10号を迎えることになりました。本誌の発行を支えて下さって来た歴代の編集委員、査読の労をお取り下さった皆さま、そして論文を執筆していただいた投稿者に深く感謝申し上げます。若輩ながら、この雑誌の創刊に多少関わりを持つ者として、思い出話を語ることで、巻頭の言に代えたいと思います。

私は、高井収先生、早坂慶子先生とともに、第1号である支部15周年記念論文集の編集を担当させていただきました。論文の応募数も比較的多く、15周年のお祝いの原稿も先輩諸氏からたくさん寄せられて、創刊号の発刊は比較的順調でした。しかし、第2号以降の定期刊行化は一筋縄ではいきませんでした。

まず、名称変更が役員会の議題に。実を言うと、第1号の副題 Hokkaido JACET Journal は私が印刷間際につけたもので、会議を通して支部役員の総意によってつけた名称ではありませんでした。他誌でも、学会名に Journal とついたものが多く、北海道支部から出るのだからこれでいいじゃないかと、雑誌の命名について深く考えてはいませんでした。

ところが、審議を始めると、当時 JACET の全国誌は *JACET Bulletin*。やはり *Bulletin* でそろえなくてよいのか、というご意見。地域名が入るとローカル誌であることが丸見えで、中身もそれなりのものにしかならない。地域名を外して、世界中どこに出しても学術ジャーナルらしい名前にしておくべきであるというご意見。反対に、北海道支部で出しているのであるから、北海道のアイデンティティが薫る名前であれば愛着がわからないというご意見。会議の中で候補の単語をいくつも並べて組み合わせを長時間話し合い、やっと現在の誌名にこぎつけました。こうして発行した第2号でしたが、そ

の報告をした JACET の本部役員会での顛末は、当時の西堀支部長の御寄稿をお読みください。

第2号、第3号と私が他の諸先生の助けを得ながら編集に携わりましたが、公募とは言え、同じ人間が長く編集に関わることで応募に偏りが出まいかと危惧しました。そこで、編集委員会を立ち上げて、松本広幸先生に、その後青木千加子先生に委員長をお願いしました。仕事を委員の間で分割するようにしたのですが、やはり現実には実際の編集作業で委員長に大きな負担がかかってしまい、お二人には大変申し訳なく思っております。

タイトルの頭文字を取って RBET と表記された本誌が、いつのころからか「アールベット」と呼ばれるようになり、支部会員の皆さまに親しまれるジャーナルになりました。毎号掲載数が少ないので、細々という印象が否めませんが、掲載されてきた論文の1編1編は、査読の過程を経て質の高いものとなっています。また、本誌を通して研究、論文執筆の技能を高め、全国誌への投稿、掲載に至っている会員を見ると、支部で学術誌を発行し続けて来た甲斐があったと喜んでおります。

名称は世界中どこにでも出せるものになりましたが、中身はどこか土臭さの残るものになって行ってほしいと願っています。そして、その土臭さを、世界規模で交流できるようなジャーナルになってくれたらと夢見ています。この10年は、英語が使える日本人育成のための戦略構想が文部科学省より出され、センター試験へのリスニング試験の導入、Super English Language High School の指定、小学校英語教育の開始、学習指導要領への英語による英語授業の記載と、日本の英語教育を取り巻く状況が大きく動いてきた時期と重なります。少子化の影響もあって各大学では魅力ある英語教育プログラムが生き残り戦略の一つとして重要視され、改善の努力が重ねられてきました。国の施策として、受け入れ・送り出しの短期・長期留学生増加と、英語を媒介言語とした大学教育プログラムの設定が奨励されました。英語教育研究をタイトルに謳った本誌に、まさにふさわしい10年だったと言えるでしょう。

最後になりましたが、本号を編集いただいた委員各位、ならびに記念号にご投稿・ご寄稿いただいた諸先生に感謝申し上げて、結びといたします。